

日本特殊教育学会第52回大会参加報告

武富 博文
(教育支援部)

要旨：日本特殊教育学会第52回大会の概要と同大会において企画・運営に携わった2つの自主シンポジウムを中心に報告する。本大会は、平成26年9月20日（土）～22日（月）の3日間、高知大学朝倉キャンパスを中心に開催された。「地域の連携を新たなステージへ」を大会テーマとして設定し、特別講演、学術講演、学会賞受賞者講演、教育講演、各種シンポジウム、口頭発表、ポスター発表等、多彩なプログラムが企画された。筆者が企画した自主シンポジウム1「特別支援教育におけるキャリア教育（6）」では「再考・キャリア発達支援とは何か」をサブテーマとして設定し、2名の話題提供者、1名の指定討論者により議論を深めた。また、運営に携わった自主シンポジウム77「知的障害教育における組織的・体系的な学習評価を促す方策」では3名の話題提供者、1名の指定討論者により、国立特別支援教育総合研究所（以下、「特総研」という。）専門研究B知的班の研究課題に関して情報普及並びに意見収集を行った。

見出し語：日本特殊教育学会、大会報告、自主シンポジウム報告、学習評価

I. 大会主旨について

日本特殊教育学会第52回大会が、平成26年9月20日（土）～22日（月）の3日間に亘り、高知大学朝倉キャンパス、高知県立県民文化ホールを会場に開催された。四国での開催は第39回の香川大会以来、13年振りとなるこのことであった。静かな高知大学最寄りの駅ホームは大勢の参加者で溢れ返り、9月下旬の爽やかな気候にも関わらず、会場は熱気で満ち溢れ、汗ばむほどの状況となっていた。

今大会のテーマは「地域の連携を新たなステージへ」であった。全国各地で展開されている地域連携の取組が、いかなる過程を経て発展してきたのか、また、現在における課題は何なのかを共有し、更なる連携の深化に寄与することを目的として本テーマが設定されていた。今大会の運営の中心となる高知大学では、高知県と協働して平成20年より高知発達障害研究プロジェクトを立ち上げ、「発達障害の早期スクリーニング、教育的支援、就労支援、専門性向上に関するプロジェクト研究」を進めていた。また、高知県はスウェーデン Gillberg Neuropsychiatry Centre, University of Gothenburg と研究協定を結び、高知ギルバーク発達神経精神医学センターを設立し

て、発達障害に関する包括的な研究を行っていた。研究機関と行政機関、教育・医療・保健・福祉・労働といった各専門機関が連携・協働して、発達障害の特性理解と成長に応じた一貫した支援体制整備を目指す研究の取組を進めている状況については、2日目に会場を高知県立県民文化ホールに移して行われた特別講演や学術講演の中で詳しく述べられたところである。今大会の主旨を多くの関係者に直接、語りかける有意義な講演会であった。

II. 大会期間中の主なスケジュール

大会初日の9月20日（土）は自主シンポジウム27件、口頭発表16件、ポスター発表が2セッションで合計221件、学会企画各種委員会シンポジウム2件、学会企画教育講演1件、準備委員会企画学術講演1件が設定され発表・協議等が行われた。2日目の9月21日（日）は自主シンポジウム25件、口頭発表10件、ポスター発表が1セッションで110件、学会各種委員会シンポジウム2件、学会企画受賞者講演3件、学会企画各種委員会ワークショップ1件について発表・協議等が行われた。3日目の9月22日（月）は自主シンポジウム35件、口頭発表14件、ポスター発

表1 日本特殊教育学会第52回大会の3日間の主なスケジュール

| | 9月20日(土) | 9月21日(日) | 9月22日(月) |
|-------------|---|---|--|
| 08:50~10:20 | | 学会企画各種委員会シンポジウム2件 口頭発表1セッション5件 自主シンポジウム13件 | 準備委員会企画シンポジウム1件 口頭発表1セッション6件 自主シンポジウム12件 |
| 10:30~12:00 | | 学会企画受賞者講演3件 学会企画各種委員会ワークショップ 口頭発表1セッション5件 自主シンポジウム12件 | 準備委員会企画学術講演1件 口頭発表1セッション4件 自主シンポジウム11件 ポスター発表1セッション108件 |
| 13:10~14:40 | 学会企画各種委員会シンポジウム1件 自主シンポジウム7件 ポスター発表1セッション110件 | ポスター発表1セッション110件 | 口頭発表1セッション4件 自主シンポジウム12件 ポスター発表1セッション100件 |
| 14:50~16:20 | 学会企画各種委員会シンポジウム1件 学会企画教育講演1件 口頭発表1セッション5件 自主シンポジウム10件 | 13:30~15:00 特別講演 「ESSENCE IN MEDICINE AND EDUCATION : BRIDGING THE GAP」 | |
| 16:30~18:00 | 準備委員会企画学術講演1件 口頭発表2セッション11件 自主シンポジウム10件 ポスター発表1セッション111件 | 15:10~16:40 学術講演 「発達に障害のある子どもの早期発見・早期支援のためにやってきたこと・やっていること・やろうとしていること - “自閉症” から ESSENCE へ」 | |

表が2セッションで208件、準備委員会企画シンポジウム1件、準備委員会企画学術講演1件が設定され、発表・協議等が行われた。以上の3日間の日程をまとめると表1の通りとなる。(これらはいずれも大会プログラムより集計・整理したものである。)

2日目の午後のプログラムのみ会場を高知県立県民文化ホールのオレンジホールに移して講演が実施された。会場までのアクセスは高知大学から無料の輸送バスが運行され、参加者への配慮がなされていた。また、特別講演ではスウェーデンから Gillberg Neuropsychiatry Centre所長のChristopher Gillberg教授を招き、通訳の配置及び要約筆記を正面スクリーン横に表示のもと、90分に亘り、ESSENCE (Early Symptomatic Syndrome Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations “神経発達の診察が必要とされる早期徴候症候群”)の説明を含む包括的な子ども理解の重要性と支援体制構築に関わる講演が実施された。これに引き続き、Christopher Gillberg教授との連

携を図りながら医療サイドより高知県の発達障害者支援体制構築に寄与された畠中雄平氏より学術講演が実施された。

特定の症候群や障害に特化したセンターよりも、発達的にminority groupである子どもや家族を支援する機能を持った支援の場であるESSENCEセンターが、地域の身近な場所に、一定の人口規模や地理的条件に応じて整備される必要がある旨を訴える講演が行われ、参加者も聞きながら畠中氏の話に聞き入っていた。

Ⅲ. 自主シンポジウム1「特別支援教育におけるキャリア教育(6)」の実施報告

本シンポジウムは、過去5年に亘って開催してきたシリーズの第6回目である。第1回目は、2009年(平成21年)の開催であり、丁度、特総研において2カ年に亘る研究である専門研究B「知的障害教育に

におけるキャリア教育の在り方に関する研究」をまとめる年度に、それまでの研究成果を普及し、広く関係者の意見集約を行う目的で当時の研究分担者によって企画されたものである。

「キャリア教育」という文言が特別支援学校高等部学習指導要領総則に位置づけられ、注目も高まってきた中で「特別支援学校及び特別支援学級における実践事例から改めてキャリア教育の意義を問う」とのサブテーマを設定し、3名の話題提供者と2名の指定討論者を交えて協議を展開した。この後、メインテーマは変更せずにサブテーマを変更しながら継続的にキャリア教育の意義や実践上の課題等に関する議論を重ねた。



写真1 自主シンポジウム1の様子

第6回目となる今回は、原点に立ち返って「再考・キャリア発達支援とは何か」をサブテーマとして設定した。キャリア教育の本質的な議論を聴くことができ、具体的な実践の情報が入手できるとの期待も高かったためか、会場には空席が見当たらないほどの参加者が集い、運営スタッフを含めて約90名の参加者により協議を進めた（写真1）。

司会者（筆者）による企画主旨説明の後、話題提供のトップである、島根県立石見養護学校教諭の渡部英治氏より「個」に焦点を当てた事例として、「児童生徒及び教員一人一人のキャリア発達を促す取組」についての報告を行った。児童生徒個々の「夢や希望」を活かすことの重要性について言及し、それらを具現化する活動の組立を行い、学習の過程や結果において感じる「学ぶ喜び」や「働く喜び」を通し

て自尊感情を高め、自己を肯定的に捉える中で他のことにも向き合う意欲や態度が培われていくことについて報告を行った。一方で、指導や支援に取り組む教員個人の側も、これらの過程に気付くことで児童生徒への向き合い方が変化していくこと等について併せて報告を行った。

続いての話題提供では、京都市立白河総合支援学校、校長の芝山泰介氏より「組織」に焦点を当てた取組事例として「学校をデザインする視点からキャリア教育を振り返る」と題した報告を行った。これまでに京都市立白河総合支援学校が展開してきたデュアルシステムによるカリキュラム開発や地域コミュニケーション科開設過程における学校組織の変容状況等についての報告がなされた。

この取組過程から、生徒の「学びの場」をデザインすることが「組織の在り方」のデザインでもあることについて触れられ、学校経営の方向性や目的・目標を、関わる全ての人に分かりやすくすることで、「どの様な場で、何が、どの様に育ったのか」、それは「なぜか」ということの検証や評価が可能となることが報告された。その結果、生徒や教職員個人はもとより学校組織として、また、企業や地域を含めたそれぞれの関係機関の意識や行動・事業の在り方に変容がもたらされること、双方に有益な協働の関係構築のプロセス等についての言及がなされた。この過程においても、生徒のみならず教職員等、関わる人の自己有用感や自尊感情に焦点を当てることの必要性が示唆された。

これらの話題提供を受けて、特総研教育支援部長兼上席総括研究員の尾崎祐三氏より2人の論点を整理すると同時に更に話題提供者に対して追加の質問を行い、協議を深めた。

論点整理に関しては、「障害者の権利に関する条約」の第24条を踏まえながら、キャリア発達支援を行うことが共生社会の形成に向けて重要な役割を果たすことについて指摘がなされた。共生社会の実現に向けたキャリア発達支援とは、自己肯定感を高め、積極的に社会に参加・貢献しようとする資質・能力を高めるための支援であること。学校生活だけでなく、家庭生活や地域生活においても十分に役割を果たし、自己有用感が持てるようにするための支援であるこ

と。12年間の学び、地域社会での学びの支援を組織的に行えるようにする教育活動の推進が必要であること。以上の3点で整理を図った。

今回の報告では、自尊心や自己有用感がキーワードとなっていた。一般に10代の頃は自尊心が低下する時期とも言われており、いじめや不登校など昨今の学校運営上の課題も自尊心の低下との関係で論じられることが多い。知的障害のある児童生徒についても同様のことが言えるのかということについては大変興味深いところであるが、自尊心指標として示されるものや具体的な調査データを目にすることは少ない。

いずれにしても本シンポジウムにおける報告・協議の結果として、今後は、自尊心の構造や自己有用感等との関連について明らかにした上で、それぞれを維持したり高めたりする具体的な教育実践の在り方について整理していくことが課題であると認識された。

IV. 自主シンポジウム77「知的障害教育における組織的・体系的学習評価を促す方策」の実施報告

本シンポジウムは、現在、特総研の知的班が専門研究B「知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究—特別支援学校（知的障害）の実践事例を踏まえた検討を通じて—」と題する研究を進めていることに関連して、これまでに検討してきた内容や研究協力校からの実践事例について報告し、広く情報普及と意見収集を行うことを目的に企画したものである。開催最終日3日目（月曜日）の午後からの時間枠ではあったが、30名ほどの参加者があった（写真2）。

本シンポジウムでは、観点別学習評価を基軸としながら「評価規準を設定して組織的に学習評価を進める方策」、「学習評価と指導の評価を一体的に進める方策」、「学習評価を児童生徒への支援に活用する方策」についての課題を整理する中で知的障害教育において「組織的・体系的な学習評価を推進する方策」を探ることを目的とした。さらに、教育活動全体の改善プロセスにも焦点を当て、学習評価や評価

計画を含む学習指導のPDCAサイクルを組織的・体系的に進める方策について検討することを企画主旨とした。



写真2 自主シンポジウム77の様子

まずは、話題提供として研究副代表である特総研教育研修・事業部主任研究員の松見和樹氏より本研究の目的・内容・方法の説明と現在の進捗状況についての報告を行った。特に知的班において作成した「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」を基に学習指導と学習評価の重層構造について解説を加え、本研究が課題としている内容の全体像を示した。

次に、研究協力校である愛媛大学教育学部附属特別支援学校教諭の加藤公史氏より「観点別学習評価の導入と学習評価を授業改善に活かす実践例」と題する報告を行った。愛媛大学教育学部附属特別支援学校では、キャリア教育の視点に立って、「単元・学習内容設定の工夫」、「学習環境・支援の工夫」、「評価の工夫」を柱に、授業評価の仕組みを取り入れた授業改善を基盤とする実践研究を進めている。これに加えて、児童生徒の学習状況を分析的に評価するための観点別学習評価を行い、評価規準を設定して学習評価を行うことにより、児童生徒のキャリア発達が確実に促されていく過程や、授業そのものが、生活の質を高め、生きる力を身に付けるための形に改善されていく過程について報告を行った。このことは即ち、観点別学習評価の有効性について言及することとなった。

話題提供の最後として広島県立庄原特別支援学校校長の東内桂子氏より「学習指導略案と単元計画を

活用した学習評価と教育課程の改善との関連について」と題する報告を行った。広島県立庄原特別支援学校では、教育課程の評価を含む学習指導のPDCAサイクルに学習評価を位置づけており、学習指導略案の様式を全校で統一し、授業の評価、児童生徒の主體的な姿勢等について記入できるようにすることで、授業の改善にもつなげていた。また、これ以外にも各種の書式を統一したり、教育課程検討会議を機能させたりすることにより、授業の評価を単元の評価、年間指導計画の評価、ひいては教育課程の評価と関連付けていた。これらの点は本研究が目的とする組織化・体系化された学習評価の取組を具現化するものとなっており、教育課程改善の具体的モデルを示すものと考えられた。

最後に指定討論者である文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官の丹野哲也氏より3人の話題提供者の論点整理と観点別学習評価の精度を高めるポイントや組織的・体系的に学習評価を推進していくためのポイントについて整理が図られた。観点別学習評価の精度を高めるには指導目標の精度を高めることが最も重要であり、より具体的に場面や条件を限定して評価できる項目を設定することが必要との指摘があった。また、組織的・体系的に学習評価を推進していくポイントとしては、観点別学習評価を共通の言葉として活用し、授業改善に活かす取組を核として設定したり、学習指導略案や単元計画の書式等を工夫して、学校全体が共通のステップを踏みながら授業や単元について検討したりすることが重要であり、この過程で一定の共通理解が図られ、取組が推進されていくことについて言及がなされた。

フロアーの参加者より「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「知識・理解」、「技能」の観点別で児童生徒の学習状況を見取ることの難しさについて意見が寄せられた。この点については、むしろ4観点をはじめとした多様な観点の設定によって児童生徒の学習状況を把握していくことで、単なる教え込みによる知識や技能の獲得とはならず、関心や意欲等を伴った、生活の実際場面に生きる形で学習されているかどうかの分析的な判断ができるとの見解が示された。

本研究においては、学習状況を分析的に見取ることができると実感できるような実践事例の詳細な紹介も課題であると認識できた。また、組織的・体系的な学習評価の取組を推進するための方策として、より具体的に教育課程マネジメントの手法である学習評価検討グループの設定、学習評価書式の設定、学習評価集約システムの設定等、様々な要素を例示することで、可能な部分から取組を開始できるように情報提供を行っていくことが重要であると認識できた。

V. 本大会への参加を終えて

本大会の詳細な参加者数や参加者の職種等についてのデータは現段階で不明であるが、大会プログラムや実際の各会場の雰囲気からは、学校現場の教職員、大学等研究機関の教職員、学部学生・大学院生、教育行政関係者、医療・福祉関係者等、様々な立場からの参加者が、それぞれのニーズを満たすべく、ほど良いバランスで参加されていると感じた。

このような状況の中で情報交換や資料交換・意見交換が活発に行われ、それぞれの参加者が必要とする情報を入手できる機会となっていたと感じる。筆者自身も自主シンポジウムの企画・運営の他、重度重複障害のある児童生徒のコミュニケーション支援の在り方やアセスメントに関する情報、特別支援学校のセンター的機能に関する情報、ICT機器の活用に関する情報について、業務上または研究上、大変興味のあるところであり、発表資料等を含めて数多くの情報収集を行ったところである。これに加えて様々な情報をもたらしてくれる研究者や現場実践者等との出会いの場、再会の場ともなっており、関係者間のネットワークを構築できる機会ともなっていた。これらの点も含めて、多彩なプログラムの提供があり、大変有意義な3日間を過ごすことができた。

開催地である高知県の独自性を出しながらも全国の先進的な取組や特別支援教育推進上の諸課題等について幅広く、またバランス良く情報提供をいただいた日本特殊教育学会並びに準備委員会の皆様方に心より感謝申し上げたい。

参考文献

日本特殊教育学会第52回大会準備委員会（2014）. 日本特殊教育学会第52回大会（2014高知大会）プログラム.

一般社団法人日本特殊教育学会. <http://www.jase.jp/>
（アクセス日, 2014-10-01）

国立特別支援教育総合研究所（2009）. 知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究—「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して—研究成果報告書.